

# バレーボールの競技場面にみる技術的關係性に関する一考察

○大隈節子 [三重大学]

キーワード：バレーボール 連携プレー 技術的關係性

## 1. はじめに

近年、バレーボール界においては、世界各国間での戦術の平板化、データによる戦術の可視化が進むことにより、結果として身長や身体能力に優れた海外のチームが常勝している現状にある。このような情勢の中で、全日本男子チームにおいては、2013年に行われた世界選手権のアジア最終予選に敗れて本大会出場を逃し、11月のワールドグランドチャンピオンズカップでは5戦全敗という結果に終わっている。一方、全日本女子チームにおいては、男子同様に身長差・体格差の壁は大きくなっているものの、「MB1」や「ハイブリッド6」といった新たな戦術開発の取り組みがなされ、その新たな取り組みに期待が寄せられている。振り返ってみれば、わが国のバレーボール界が世界で活躍した時代というのは、世界との身長差やパワーの違いをバネに、様々な技術や戦術を先取りして編み出した時だったと言える。例えば、東京五輪において全日本女子チームが金メダルを獲得できたのは、「回転レシーブ」により守備力が高まった結果であることや、ミュンヘン五輪において全日本男子チームが金メダルを獲得できたのも、世界ではじめて「時間差攻撃」を開発したことにより、壁のような海外選手のブロックを翻弄することができたから、ということとは周知の事実であろう。

これまでに本発表者は、集団競技スポーツにおいて複数人の競技者間で展開される戦術的な「連携プレー」の解明に向け、競技者間での技術的關係性と身体知との関連性について理論的な部分での検討を進めており、競技者間で共有されている間主観的な身体知としての技術的關係性への認識の在り様が、スポーツ技能に影響を及ぼし、競技力の向上へとつながっていくことを提示している。特に集団競技においては、個人技能に留まらず、より多様な味方競技者間での技術的關係性が生成されることによって、さらに高度な戦術的展開が可能となるのであり、そこで共有される身体知こそが競技者としてのアイデンティティにつながっていくものと考えている。

そこで本研究では、これらの理論的前提をもとに、バレーボールの攻撃をめぐる競技者間での技術的關係性に着目し、戦術的な連携プレーについて検討することを目的とする。

## 2. バレーボールの競技特性について

本研究者はこれまでに行ってきた研究<sup>1)</sup>の中で、バレーボールの競技特性を「ボールを保持できず、さらに連続してボールにヒットのできない(1チーム6人ずつの)プレーヤー同士が、3回以内の触球を通してボールをつなぎ、ネットを挟んだ相手コートにボールを落とすことを目的に攻防を展開する競技種目」であることから、味方競技者との連携した動きやプレーが特に要求されるネット型のボールゲームである、と捉えてきた。

また、同じネット型競技種目であるバドミントンや卓球などは、常に1回のボールヒットで相手コートに返球し、「守備＝攻撃」となるのに対し、バレーボールは自コート内に相

手から攻撃されたボールを落とさないための「守備：(レシーブ)」の局面、味方への「つなぎ：(トス)」の局面、相手コートにボールを落とすための「攻撃：(スパイク)」の局面の3局面で1つの戦術的展開が可能になることが特徴として挙げられる。

また、ボールを保持することができないという点において、1つのラリーがはじまってから終わるまで、プレーヤーがボールと接触できる時間はほんの一瞬であり、ラリー中のほとんどの時間においてボールは一時も留まることなくネットを挟んだ両コートを行き来している。つまり、視点を変えてみれば、両チームの競技者による個々のプレーは、これらの「間」の創出・断絶行為として捉えることができる。

更に他の競技種目にはない独自の点として、バレーボールにはローテーションのルールが採用されており、試合中選手は他の競技種目のように1つのポジションでプレーをし続けることができない、ということがあげられる。

### 3. バレーボールにおける攻撃戦術時の課題点と選手間での技術的關係性について

ヤーン・ケルンは、著書スポーツの戦術入門<sup>2)</sup>の中で、直接相手と対峙してゴールを争うチームゲームの攻撃戦術を考える場合には、①防御ラインを破る(ノーマーク)、②人数的優位をつくる(オーバーナンバー)、③空間的優位をつくる(オープンスペース)の課題を解決するための戦術の考案が必要であると言っている。バレーボールはネットを挟んで直接的な身体接触のない競技種目であるため、これらの観点をバレーボールに置き換えると、①攻撃において相手ブロッカーとの間での人数的優位をつくる、②相手レシーバーとの間に空間的優位をつくる、③相手チームのブロック・レシーブの守備連携システムを破る、の3つの解決すべき課題に置き換えて考えることができる。

また、集団競技スポーツの中でも特にバレーボールは技能レベルの高度化を目指し、チームプレーヤー間の連携やコミュニケーションを図ることが技術・戦術的レベルアップにつながるところに「魅力」が感じられるスポーツであり、これらの課題解決もまた個人戦術の域を超えた競技者間の技術的關係性の多様化によって戦術の高度化は実現可能となるものと考えられる。

学会当日の発表時においては、バレーボールのゲーム場面でみられる攻撃戦術について、上記の課題解決に向けた競技者間での技術的關係性の具体例を示しながら検討を進めていくことにする。

### 4. 参考・引用文献

- 1) 大隈節子 バレーボール競技者の身体知に関する社会学的一考察－技術的關係性の「間」に着目して－ 九州レジャー・レクリエーション研究 pp.9-15. 2014年
- 2) ヤーン・ケルン スポーツの戦術入門 大修館書店 東京 pp.39-40. 1999年